男性役割における多元的無知

○董星宇・森永康子 (広島大学大学院教育学研究科)

男性が家事育児に積極的に参加しないのは,多 元的無知が生じているためではないだろうか。さ らに, そこには, 家事育児をすることで男らしさ の規範から逸脱し、ネガティブな評価を受けると いう予測が関与しているのではないか。多元的無 知とは「集団の多くの成員が、自らは集団規範を 受け入れていないにもかかわらず, 他の成員のほ とんどがその規範を受け入れていると信じてい る状況」である (神, 2009, p. 300)。 例えば, 宮 島(2018)は、日本における男性の育児休業の取得 率の低迷に, 多元的無知が関与していることを確 認した。本研究では, 多元的無知により男性の現 実的な家事分担が理想の家事分担よりも小さく なること(理想と現実の差が大きくなること),多 元的無知と家事分担の両者をネガティブ評価の 予測が媒介することについて検討する。

方法

参加者 インターネット調査会社を通じ,20~29 歳の男性283名を対象とした。平均年齢は24.83 歳(*SD*=2.867)であった。

質問項目 (a)宮島(2018)をもとに「夫は家庭で家事や育児に専念し、妻が働き収入を得る」という役割分担(以下、進歩的役割分担)に対する態度を「容認できる」「支持する」などの項目で測定し、同様の項目を用いて、同世代男性の態度を推測させた(同世代の男性は容認するだろう、支持するだろう)。各4項目、6件法(α s>.88)。(b)ネガティブ評価の予測(参加者が家庭主夫になったら、他者からどう評価する)。6項目(「男らしくないと思われる」等)、6件法(α =.758)。(c)妻の収入が家族を養うのに十分な状況で、自分と妻の理想的・現実的役割分担の割合($1\sim100$)。

操作的定義 本研究では、多元的無知を「自身は 肯定的に評価するが、他の男性は否定的に評価す るだろうと知覚している状態」と操作的に定義す る。そのため、進歩的な役割分担に対する個人態 度と他者態度推測の回答を、それぞれ中点である 3.5 を基準として「ポジティブ」と「ネガティブ」 に二分し、参加者を4群に分ける。

結果

分析は宮島(2018)をもとに行った。まず、「多元的無知群」(26人)と「自他ポジティブ群」(152人)を抽出した。両群の平均値を Table 1 に示す。平均値の差の検定を行なったところ、ネガティブ評価の予測のみに有意な差が見られた(t=-5.429, p<<.001)。次に、仮説にもとづき媒介分析を行ったが、ネガティブ評価の媒介効果は見られなかった。媒介分析の結果は Figure1 に示す。

Table 1 自他ポジティブ群と多元的無知群の平均値 ()は SD

	自己	他者推測	ネガ	理想分担	現実分担
自他ポジ群	4.778	4.706	3.576	54.658	52.743
	(0.730)	(0.708)	(0.730)	(19.480)	(20.269)
多元的無知群	4.298	2.683	4.513	61.846	53.385
	(0.543)	(0.631)	(0.974)	(21.592)	(18.980)

理想分担と現実分担は、参加者が家事を分担する割合

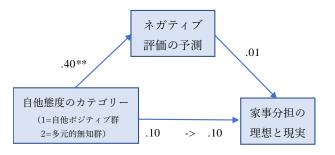


Figure1 媒介分析の結果

考察

参加者の男性の中には、自分は専業主夫に肯定的だが、他者は否定的だと判断する人もおり、人数は少ないながら多元的無知が生じていた。男性が家事に積極的でない原因の一つに多元的無知がある可能性が示唆されたと言えよう。また、多元的無知群と自他ポジティブ群の比較では、前者が他者からのネガティブ評価を高く予測していることが示されたが、家事分担の理想と現実の差には関連しなかった。これは、回答者に独身者が多く(83.39%)、現実の役割分担の回答にも理想が影響していたせいではないかと考えられる(現実と理想のr=0.454)。